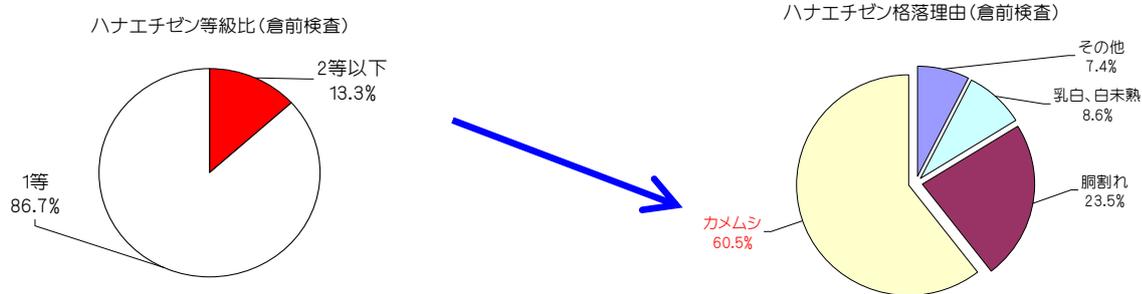


平成24年産米作柄概況を振り返って

10月15日現在における福井県嶺北の水稲の作柄は、全もみ数・登熟がそれぞれ平年並みとなったことから、10aあたり予想収量は525kg(作況指数100)となっています。登熟は出穂期以降多照で推移したものの、高温による稲体の消耗がみられたことから「平年並み」となりました。

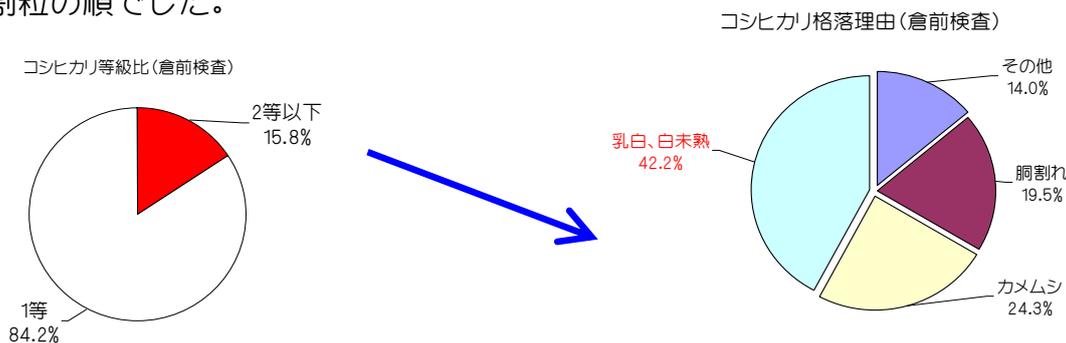
ハナエチゼンは、田植後5月10日から13日にかけての低温により、初期生育が遅れた圃場が見受けられました。その後も幼穂形成期頃までは、平年と比較して若干遅れて推移しました。出穂は7月17日頃で、その後は高温多照で推移したことから出穂後の登熟が早まりました。

今年度の倉前検査の上位等級比率は86.7%(23年83.0%、22年83.5%、21年91.8%)となりました。格落ち理由は依然としてカメムシによる斑点米が一番多くなっています。



コシヒカリにおいては、田植後5月下旬の天候に恵まれ田植後の活着はおおむね良好でした。その後の気温が平年よりやや低めに推移したことにより、草丈は平年を下回り、幼穂形成期は2日程遅れました。

出穂は8月4日頃で、高温登熟条件となったものの日較差が平年より大きく推移したため、今年度の倉前検査の上位等級比率は84.1%(23年68.8%、22年66.5%、21年84.2%)となり、前年と比較して改善しました。格落ち理由は、白未熟粒、斑点米、胴割粒の順でした。



あきさかりについても、田植後の生育は順調で茎数も充分確保されました。出穂は8月7日頃で、収穫間際の9月17日にフェーン現象が発生したことにより、刈取りの遅れた圃場では胴割れが発生し、倉前検査上位等級比率は75.9%(23年78.5%、22年68.9%、21年94.9%)となりました。



平成24年産特別栽培米の取り組みと結果について

今年度の特別栽培米の取り組みは、申請受付に始まり、計画申請書の作成・提出、越前たけふ農業公社による2回の栽培記録簿並びに圃場審査を経て、今年度認証された特別栽培米面積は495haとなり、前年実績381haと比較して114ha増えました。

4月24日 栽培講習会



7月12日 現地作見会



7月・8月 圃場審査



9月4日 出荷説明会



集荷、検査状況

今年度、特別栽培米は10月末現在で27,359俵集荷され、面積の増加に伴い昨年の19,911俵に対し7,448俵多く集荷されました。

特別栽培コシヒカリについては、上位等級比率が86.4%（前年64.8%）となりました。

そのなかで食味値85以上は2,472俵、食味値80以上が6,683俵、合計で9,155俵と、食味値80以上がコシヒカリ全体の39.8%（前年31.5%）となりました。

出荷俵数、上位等級比率
(特別栽培コシヒカリ)

